

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

池工山岳部 日帰り山行

「2月は去る、3月は逃げる」のたとえ通り、気づいてみればもう3月も半ば。慌ただしい2月にはクラブの山行を実施できなかった。そこで、2月分ということで、卒業式後の3月4日、日帰りで鉢伏山に登った。コースは千石から入山し、牛伏寺に下る縦走コースとした。天気予報では夕刻から雨ということであったので、あまり期待はできないと思いつつも降られる前に下りられれば御の字と8時40分、登山口を出発した。今回は行くはずだった生徒の一人は脱臼、もう一人は発熱ということで生徒は2名になってしまった。顧問は藤田先生と私に加え会田中学校の中川先生もお誘いした。

2月半ばには真っ白だった山頂も、麓から眺めている限り、一雨ごとに雪が消え、黒い山肌が見え始めてもいたが、念のためワカンを持参した。登り始めはそれほど雪もなく快適な登りである。いつもの通り、至るところに鹿の足跡があり、笹はすべて餌食となり1枚の葉っぱも残っていない。そんな場所柄、時折鹿撃ちの銃声も聞こえる。1500mを越える頃から雪が多くなり、トレースもないので、結構なラッセルとなった。ワカンはあるが、稜線は近い。トレーニングも兼ねてそのままツボ足で進んだ。出発から、2回の休憩を挟み、11時15分に稜線に出た。11時55分、前鉢伏手前の1840mピーク。あまり期待せずに登ったのがよかったのか、我々の到着を待っていたかのような北アルプスと美ヶ原を望む素晴らしい眺望が広がっていた。この景色に生徒たちからも歓声があがった。ここでワカンを装着し、いったん鉢伏山荘方面に下り、最後の一登り。12時35分、鉢伏山頂三角点に到着。眼下の松本平を挟んで雄大な北アルプスの大パノラマが広がる。ここから「くの字」型に折れ曲がる山頂台地を南東の突端まで進み、今度は眼下に諏訪湖を、遠景に八ヶ岳を望みながらラーメンを作って食べた。残念ながら富士山、南アルプス、中央アルプスは見えなかったが、地形と樹木の関係だろうか、山頂でありながらここはいつも比較的風がない。去年も来た部長の野村君はそのことを覚えており、「先生去年と同じですね。」と一言。冬の雪上でのラーメン。心も身体も温まり、生徒の心には深く刻まれる。たかがラーメン、されどラーメンだ。

14時下山開始。1610mまで車道を下り、14時30分に牛伏寺へ下る尾根に分岐した。メインルートであるこちらはトレースもある。しばらく下ると雪が少なくなり痩せ尾根となった。ここを注意してくだり、16時06分牛伏寺に到着。同時に雨が降り出した。

4月から長野県山岳総合センターが変わります

前号で長野県山岳総合センターの講座を紹介した。すでに知る人ぞ知るところになっていることではあるが、来年度からセンターの形態が変わる。

・・・長野県山岳総合センターは昭和44年4月に開所した。登山ブームという背景の中、山岳県長野が貴重な財産であり、教材である大自然とそれを楽しむ県民のパイプ役を担うセンターを、長野県山岳協会は長野県とともに提案、準備をし、建設したという。その目的は山岳に関する研究、調査と健全な登山の教育事業を行なうことで、「山岳総合

センター」という名前もこれに基づいたものだった。以来、43年間長野県山岳協会は、センター運営に関わり、講師派遣等を通じ最大限の協力、支援を続けてきた。このセンターの設立当時からの研修会が毎年5月に針ノ木で行なわれる「高校生登山研修会」だ。センターができる以前から行なっていた中信地区の高校山岳部の自主的な研修を、センターが受け継いだということのようだが……。それはともかく、そのセンターの運営について、一昨年末から指定管理制度への移行という動きが出てきた。長野県山岳協会としては、県へ運営を続けて欲しい旨を陳情するなどの活動をしてきたが、県は昨年6月県会で移行を決定した。その後、指定管理者を12月までに選定、今年（2012年）4月には実施するという計画を示した。

この忙しいスケジュールの中、長野県山岳協会では「山岳総合センターの本来の使命を果たすこと」と長野県山岳協会の「正しい登山の指導普及、発展をはかる」という目的追求のためには、指定管理者に応募した方がよいという結論に至った。金もノウハウもない山岳協会に運営ができるのか、経営的に成り立つのか、専従の職員を雇用できるのか、煩雑な手続きはクリアできるのかなど、可能な限り検討を加えた上で、困難を承知で応募を決定した。この過程で、大筋で考え方の共有ができた「NPO法人信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ」のみなさんと共同応募ということを決めた。結果、昨年12月県会で正式に「長野県山岳協会・やまたみ」が指定管理者に決定した。

このような経過で、来る4月から山岳総合センターの運営は、県から委託された「長野県山岳協会・やまたみ」が行なうことになった。基本的には従来のセンターの研修会や講習会を踏襲し、さらにお役所仕事ではできなかった部分を民間として拡充する方向で考えている。そのためにこれまでは不要だった使用料を徴収するなどということも出てくるが、逆に土日や平日の8時までのボルダー壁の使用が可能になるなどの利点もある。主催事業としては、これまでの「安全登山」系の研修会に加え、「野外活動」系の研修会も大幅に増える。これらの研修会はもちろん、各高校や高体連、山岳会などでも独自の研修会など積極的に活用し、支援をしていただきたいと考えている。

編集子のひとりごと

あの3.11以後、何もできなかった。1年経った今、被災地の現状を、この目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、肌で触れて来たいと思い、2月末被災地を訪ねた。津波が二階部分まで達した石巻市立鳴瀬二中から見る海は、遙か彼方だが目の高さに見えた。あんな遠くから津波が来るのかと思った。一方で高台にある女川第二小学校は、高台であるが故にギリギリ津波の被害を免れた。問題は距離ではなく、高さなのだ。海に対峙するかのようには立ち上がり、津波を受け止めた鳴瀬二中の校舎の時計は津波が襲った3時45分を指して時を刻むのを永遠に止め、二階の教室の黒板には3月11日の卒業式当日の卒業を祝う言葉がそのまま残っていた。石巻湾から200mに位置する石巻女子商業。捨てられた校舎の脇にまだなお残るおびただしい瓦礫は、そばに近寄るだけで漂う異臭を放っていた。焼け焦げた門脇小学校。綱渡り状態の女川原発の現実。1年経った今も復興はまだ全く進んでいない。しかし、それでもそこに生きる人々が一歩ずつ進んでいる。案内してくれた現地の先生方のことばの端々にそれを感じ感銘した。教師の端くれとして、この体験を語り継ぎ伝え続けることが使命であると思った。決して風化させてはならない。学校に帰ってその一端を話したが生徒たちは真摯に耳を傾けてくれた。(大西記)